

西田幾多郎田中上柳町旧宅について

林 晋
市川 秀和

はじめに

西田幾多郎は、その生涯の内に何度も転居を繰り返す多くの家に住んだ。その西田旧宅の一つが、今年二〇一六年に解体された。それは、西田が、大正元年から大正十一年まで住んだ京都市左京区田中上柳町の家である。西田旧宅としては、この家の直後に住んだ田中飛鳥井町の家が有名であるが、そこで起きた数々の出来事を考えると、西田幾多郎という一人の人物にとつては、この田中上柳町の家ほど、印象深い家はなかったと思われる。それは、長男の死により、西田家の跡取り息子となった次男外彦が、この家を「父にとつても私にも最も思ひ出の多い家である」と書いていることからうかがえる（西田外彦 一九四六）。

著者の一人、林は、幾つかの偶然から、この家の保存について、所有者の御子息から相談を受けることとなったが、建物の保存に関わった経験が全くなかったため、建築史が専門で田中飛鳥井町の家書の書齋の保存にかかわっている市川に協力を求め、連携して、この家の保存活動を行った。

西田が、その創刊に関わった雑誌「哲学研究」の六〇〇号出版に際し、この家について書いて欲しいとの依頼を

受けたので、我々の保存活動と、この家が西田研究や京都市派研究に対して持つ意味について報告を行う。

我々の保存活動は、新聞、テレビなどでも大きく報道されたので、ご覧になった方も少なくないものと思う。また、林が主催するWEBアーカイブ「京都市派アーカイブ」に、この家と、我々の活動に関する多数の写真、動画、間取り図、この家での西田と西田家の歴史、そして、数々の訪問者などについての調査結果を掲載している。

これはWEB検索で、「京都市派アーカイブ」あるいは、「西田幾多郎田中上柳町旧宅」を検索すれば見つけることができる。写真には、三六〇度パノラマ写真も含まれている。また、そのパノラマ写真と同時に撮影した、より撮影地点が多い、Google、ストリートビューの映像が、Google・マップで「京都市左京区田中上柳町91」を検索することで閲覧できる。

これらの情報を、ここで再現するのは、屋上屋を重ねるだけになるので、それは避け、アーカイブでは未公開で、また、ほとんど報道もされていない、保存活動の経緯と、この旧宅に注目することの学術的意味について以下に記す。

一 保存活動の経緯

京都市左京区田中上柳町の西田幾多郎旧宅は、江戸期から続く、この地の旧家である澤村家が所有する数軒の家のひとつであった。当主豊氏によると、澤村家は、少し離れた百万遍辺りの土地も持つ地主であったそうだが、時代の波により、所有する土地は減り、現在は、田中上柳町の一角だけになっている。しかし、それでも五〇〇坪近くあるのではと思われる広い敷地に、江戸期に建てられた母屋と、数軒の貸家が建っていたが、その多くが老朽化したため、これらをすべて取り壊しマンションとする計画が立てられた。

その際、その貸家の一軒に「京大の偉い学者が住んでいた」と伝え聞いていた、澤村家のご子息陽氏が、WEB

上で調査をしたところ、著者の一人市川の論文（市川 二〇〇三）が見つかったのである。

この論文には西田旧宅の外観写真が掲載されており、それにより市川が論じた西田旧宅が、澤村家の母屋の西隣にある古い貸家であることが判り、「京大の偉い学者」とは西田幾多郎のことだと判明した。

市川の論文には、三宅剛一が西田全集の月報のために書いた文章（三宅 一九五三）が引用されており、それは、「文学部への通学の折に西田先生の家の前を通ると、西田先生が檻の中のライオンの様に、二階の外廊下を行ったり来たりしながら思索をしているのが見えた」という意味のことが書かれていた。

この後、陽氏が、西田についてWEB上で調べるうち、著者の一人林が主催している「京都学派アーカイブ」が見つかり、その写真資料を撮影したのが株式会社清水光芸社であることを知った。この清水工芸社の清水社長が、偶々、陽氏と知己であったため、同社長を通して、林に保存への協力依頼があり、陽氏と林が電話で連絡を取り合うようになった。

その際、陽氏からは、西田が歩いた二階外廊下をマンシヨンの共用部分に展示したい、その際の展示方法などの相談に乗ってほしいという要望が出され、林は協力を約束した。これが二〇一五年の十月下旬のことである。この時、貸家として使われていた西田旧宅には、まだ、入居者があり、それを考慮して、活動は、空き家になる二〇一六年一月からにすることを約束した。解体は六月であった。林は、後に建築の専門家から、古民家の保存には、通常二年はかかることを聞かされ、その時漸く、この三か月ほどの時間のロスが、残念なことであったことに気が付いたのである。しかし、この時には、まだ、そういう知識は一切無く、過去に重きを置かない人が多い日本の残念な状況の中で、澤村陽氏の外廊下保存の計画を貴く思い、そのお手伝いができればという程度に考えていただけであった。

この程度にまで、建物の保存に無知であった林は、知識や経験のある方の応援を求めて、田中飛鳥井町の西田旧

宅の書齋を移築保存している石川県西田幾多郎記念哲学館の山名田学芸員に連絡をとった。山名田氏は、山口市の西田旧宅の保存の契機となった調査を行った人でもあり、興味を持ってもらえるものと思つてのことであつた。これには、もしかして、哲学館で、田中上柳町の家の移築保存を考えてもらえないかという、淡い期待があつたことは、この際に正直に記しておきたい。林は、これもまた素人考えであることに、後に、用地は別にしても九〇〇万円はかかるという移築費用の見積もりを見せられたときに気づくことになつたのだが、この哲学館への連絡が、市川の保存活動への参加につながる事になつた。

一月になつて西田旧宅が空き家となつたとの連絡があり、林は活動を始めた。京大文学研究科には、日本哲学史の教育・研究を行う日本哲学史専修があり、林とは協力関係にあつたので、まず、同専修の上原教授に経緯を伝え、一月二十三日に、西田旧宅を最初に拝見したときにも、二人で訪問し、保存の必要性を感じておられなかつたご当主ご夫妻に、西田の日本哲学史における重要性などを説明した。

この時、林は、昭和二十年代に出版された旧版西田全集の最初の配本時に、三宅剛一が、その月報で檻の中のライオンの様に、西田が行き来していたと書いた二階外廊下を初めて歩いた。西田を真似て、行き来してみると、ものを考えながら行き来するのに、ちょうどよい。

林は手書き史料の分析を主にする歴史家であり、古文書の重要性は、当然ながら理解していたし、また、実際に歴史の現場を訪れることが、過去の理解を深めることがあることは、十九世紀ドイツ数学史の研究をしていたころに経験していた。しかし、歴史の現場となつた建物が持つ、文字による記録にない何かを感じたのは、この時が最初だつた。その強い印象が、建物の保存の重要性を当然の事として理解していた市川とともに、その様な理解を持たなかつた素人の林が、旧西田宅の保存活動に奔走することになつた理由であるように思う。

その専門家である市川が、西田旧宅の保存活動に参加したのは、一月になつてのことである。先に書いたよう

に、建物の調査や保存について、まったくの素人である林は、まず、西田哲学館の山名田学芸員に調査を依頼したのだが、これは時期の問題などから難しかったため、山名田学芸員から、市川に調査依頼があったのである。

市川は、これを快諾し、また、京都在住の建築の専門家の協力の必要性を感じ、旧知の京大工学部建築の田路貴浩准教授に協力を求めた。これにより、著者ら二人と田路准教授の三名で活動することとなった。そして、古民家の保存に詳しい田路准教授より、京大キャンパスに移築して、セミナーハウスとするという案が出された。

先に、林が専門家から古民家の保存には通常二年はかかると聞かされた、と書いたが、その専門家とは、この田路准教授のことである。我々に残された時間は、五カ月程度であり、困難は目に見えていたが、西田旧宅の保存の重要性ゆえに、無理は承知で活動することになった。

この後の五カ月程は、苦難の連続であったが、その詳細を記述すると膨大となるとともに、関係者を不快にさせる可能性もあるので、ここでは避け、大筋だけを記録しておく。

最初、建物全体の京大キャンパス内での保存を目指して、建物の重要性を説明する文書を作成し、京大文学研究科長を通して、大学執行部に、移築保存を提案するという案が、田路准教授から出された。これを平田文学研究科長に御説明し、働きかけを、お願いしたところ、快諾していただき、そればかりか独自に色々可能性を探っていた。そして、これが後の一部保存につながったのである。

残念なことに、平田研究科長の働きかけは、大学には受け入れてもらえず、部局の努力で京大内に保存をはかることは妨げないという公式の返事と、担当理事から非公式に博物館での一部保存を考えてはどうかという意見があっただけだった。

実は、後にわかったことだが、時期が最悪だったのである。まず、年度末であり、時間がなかった。しかも、その年度末は第二期中期計画の最終年度の年度末だったのである。現在の国立大学は、政府に提出する、こういう計

画に強く縛られていて柔軟な対応が難しい。また、京大の財政が急にひっ迫していたこともあったろう。大学執行部への上申は、さまざまな伝手を頼って、この後も数回試みたが、すべて不首尾に終わった。

このため、旧宅全体の保存は、京大以外で古民家として引き取ってもらい再生利用してもらおうくらいしか可能性がなくなつたが、解体までに半年もない状況であり、また、建物自体は、下宿屋を目的として作られた質素な明治時代の切妻造りである。使用されている材木は、専門家の話では特に良いものではない。しかも、土地を確保して移築しなくてはならず、その費用は膨大だ。古民家再生ブームの中でも、それほど魅力的なものではなかつたこの家の引き受け手はついに現れなかつた。

そのため、外廊下の部材を、できれば書斎の部材も、京大内で保管し、機会を見て再現するという方向に舵をきっていくことになつた。外廊下を最優先にしたのは、色々な文献の調査により、親族や三宅の様な弟子に目撃された、二階外廊下上での西田の往復運動を繰り返しながらの思索こそ、西田哲学の心臓部ともいうべき場所の論理に繋がる苦闘を象徴するものであることが分かつたからである（その調査結果の詳細は、先に述べたように、京都学派アーカイブで公開してある）。

しかし、この学内の引き受け先さえ中々見つからなかつた。真つ先に思いつくのは、平田研究科長が保存の意義を理解していた文学研究科による保存であるが、文学研究科は、図書館の設備更新さえ難しい財政状態にあり、また、教室や研究室が常に不足しているような状況で、保管場所の確保も難かつた。

何も打開策を見いだせず、六月上旬の解体期日に向けて時が過ぎるばかりだつた。ところが、その膠着状態の最中、ある奇跡的な偶然が起きて、廊下の部材を京大総合博物館に保存していただけることとなり、それに伴い、残りの部材と書斎の部材を、市川が自宅の倉庫に保存することができたのである。

この偶然というのは、そろそろ新学期が始まるという頃、前文学研究科長の川添副学長から、田辺元関係の史料

の所在の問い合わせが、林にあったことである。林は、長年、群馬大学が所蔵している田辺元の講義準備ノートなどの手書き史料の研究を続けてきた。昭和十九年に京大を退官した京都学派の哲学者田辺元は、戦火を避ける意味もあり、群馬県北軽井沢大学村にある彼の夏の別荘に居を移し、戦後も冬はマイナス二〇度になる極寒のその地でも過ごした。しかし、病に倒れ、前橋の群馬大病院に入院し、しばらくの闘病の後、そこで亡くなった。田辺には、子供がおらず、夫人もすでに他界していたため、死後、別荘などの財産の大半が群馬大に寄付された。そのため、田辺の日記や講義ノートなどは群馬大図書館にあり、林は、その調査を続けていたのである。

このため、林は群馬大図書館のアーカイブについての知識と人脈を使い、その史料の所在をすぐに特定することができた。実は、その史料を探していたのが、二月に平田文学研究科長が、独自に、外廊下だけでも展示できないかと問い合わせをしてくださっていた京大総合博物館の岩崎館長だったのである。

実は、最初に大学執行部にコンタクトを取って頂いたとき、平田研究科長が自身の判断で岩崎館長にも相談して下さり、岩崎館長からは、昨年の秋に言ってもらえていたら、ロビーの改修を計画していたところだったので、ロビーに外廊下を展示できる可能性があったのだが、すでに改修を終えてしまった今の時期では無理だということ、お返事を頂いていたのである。

これは、二〇一五年秋に、廊下保存の話が来た時に、すぐに動けばなんとかなかったかもしれないということなので、これを知った時には、林はかなり落ち込んだのだが、実際には、人が住んでいる家の二階の外廊下と手すりを外すことはできなかっただろう。どちらにしても無理だったと思う。

実現はしなかったものの、学内で最も好意的な、岩崎館長のお返事に我々は大変ありがたいと感じていた。それで、市川からは、博物館に再度、お願いしてみようという提案も出ていたのだが、林は、一度、無理とおっしゃったものは無理だろうと考え、それを押しとどめていた。

しかし、今回、田辺関連の史料の情報をお伝えしたところ、大変喜んでいただけただけで、こういう時期に、まったく関係がないことで、岩崎館長にご連絡をとれたことに、何かの縁の様なものを感じ、博物館ロビーでの展示は無理でも、保管だけでもお願いできないものかと、ダメ元で、お願いしてみたところ、意外にも一部の保管だけならば可能かもしれないという、大変にありがたいお返事であった。後で分かったことだが、これは博物館としても、かなり無理をしていたということであり、我々二人としては、今も感謝に堪えないところである。三人でなく、我々二人と書いたが、林が、岩崎館長に保存をお願いした四月には、田路准教授が新学期で忙しくなり、活動から実質的に離脱する様になっていたからである。

いずれにせよ、これが契機となり、市川は、博物館に保存できなかった残りの部材や、さらには書斎の部材も、保有する倉庫に緊急避難的に保存することを考え、また、古建築の修復に携わっている福井県の一級建築士の方や、ベテランの大工さん、さらには研究室の学生たちの協力を得て、二〇一六年六月八日に、博物館と自宅倉庫への部材の保存を実施したのである。それは奇しくも、西田の命日の翌日であった。その様子は、我々がとても想像できなかったほど大々的に、マスコミに取り上げられ、改めて西田幾多郎への関心の強さに驚くとともに、一月以来の苦勞が報われたように感じたものである。

二 田中上柳町西田幾多郎旧宅の持つ文化史的意味

保存までの経緯のあらましは、右の様であるが、実際には、簡単には説明できない多くの紆余曲折があった。その話は、また、何かの機会にすることにし、次に、より「哲学研究」に相応しい話題、なぜ、我々が、田中上柳町の西田旧宅の保存に拘ったかについて説明したい。

西田が、哲学者は、その著作を通して理解されるべきで、日記とか書簡などの個人的なものを通して理解される

べきでないという考えであったことは、良く知られている。

その影響であろうか、京都学派の流れを汲む日本哲学・日本哲学史の研究者たちは、西田や京都学派の哲学の内容を論じるが、歴史的存在としての西田や京都学派については、ほとんど論じることがない。著者らは歴史家であるが、歴史学の目から見ると、申し訳ないが、その様に感じられてしまうのである。

もし、西田と京都学派が、単なる学者や学者集団としてだけ意味があるのなら、それでも良いのだろう。しかし、実際には、京都学派は、単なる哲学の学術史上の現象ではなく、日本文化史の一大現象なのである。

良く知られているように、旧制高校生の一番の愛読書と言われた倉田百三の「愛と認識との出発」で、倉田が西田を激賞して以来、西田と京都学派の名声は、学界の外にまで広がった。その結果、西田を主任教授とし、田辺を助教授とする、京大文学部哲学講座は、隆盛を極めることになり、後に阪大文学部教授となった哲学者相原信作が入学した大正十三年には、哲学講座だけで入学者が三〇名に及んだということを、「師弟」（相原 一九六五）というエッセイで、その相原が振り返っている。

また、同じエッセイで、相原は、この大正の末期という時代は、一大哲学ブームが巻き起こった時代で、哲学は金にならないという常識が覆った時代だったと書いている。そして、隣人であったために、幼少のころから相原と交流があった木村素衛から聞いた話として、岩波書店の岩波茂雄が木村に外遊をすすめたとき、木村が「金がな」といっていると、岩波が傍らにあった書棚を示し「この中のどれでも一冊訳したらすぐ行ける」と言ったという逸話を紹介している。

その木村は、西田に認められ、卒業と同時に職を得て、定収入を確保したばかりか、全国を講演してまわり、それにより貧困に喘いでいた木村家を経済的に立て直してしまった。その講演旅行は、学者の義務に鋭敏な田辺元から顰蹙を買うほどに多く、また、結局は講演旅行の途上で木村は倒れることになった。それも相原は書いている。

木村は信州への講演旅行の際、昭和二十一年に急逝したのである。しかし、木村を批判的に見た、その田辺からして、その著書の印税は莫大なもので、夫人が「家が建つ」と言ったほどだった。

京大文学部における、西田の弟子たちには、戸坂や三木の様に、政治的な立場の問題でジャーナリズムに転じた人もいれば、谷川徹三の様に、大学での地歩を確実に固めながら、同時に戦前から戦後を通じて言論界で華麗に活躍した人もいる。また、田辺の時代の帝国海軍との関係も有名である。これらを考えれば、京都学派を、純粋な哲学者集団としてだけみることは、不自然なのである。

「近代の超克」などの問題により、永く、この問題に手を触れることは難しかったと思われるが、もう十分時間が経っている。長い戦後が終わり、あたかも、新しい戦前になりつつあるような今こそ、文化現象・社会現象としての京都学派の分析・研究がすすめられるべきであろう。

京都学派形成のキーポイントとしての三木清

文化現象・社会現象としての京都学派研究の重要性を提唱したが、実は、その京都学派という言葉の定義はさまざまである。哲学の理論上、西田哲学に近いものを提唱した人たちを京都学派と呼ぶとしたら、その範囲は非常に小さく貧弱なものになる。その様な限定された京都学派を、文化現象と呼ぶことはできない。京都学派を日本近代の大きな文化現象として捉える、この論説で言う京都学派は、そういう狭義の京都学派ではない。

この論説で言う京都学派とは、京大哲学の主任教授としての西田幾多郎、そして、西田退官後に、後を継いだ田辺元、この二人の京大文学部哲学講座の主任教授を中心にして京大文学部に集った人々のことを意味している。この様に定義すれば、思想上の違いから京都学派から排除されることがある西田左派などと呼ばれる人たち、たとえば、戸坂や三木も、これに入る。

実際、戸坂は別として、三木を京都学派に入れないという事は、文化現象として京都学派を考えるとときには非常に不自然なのである。それは、三木こそが、京都帝国大学文学部哲学講座の類まれにみる隆盛の歴史を考える時に、キーポイントとなる人物だからだ。そして、その事は、田中上柳町の家における、西田と三木の人間関係を通して知ることができる。

三木は自分こそが京大哲学を継ぐものだと自負し、傲慢な態度を取り続け、周囲の強い反感を受けた。三木が京大を去ることになったのは、そのことが大きかったはずである。三木の「追放」については、女性関係云々が言われることが多いが、実は、それは単に方便であり、本当は、彼の傲慢な態度が最大の原因だったのではないだろうか。いずれにせよ、周囲の三木への強い反感の中でも、西田は出来る限り三木を庇ったことは周知の事実である。しかし、それはなぜか。

これは三木がエッセイなどで繰り返し書いた西田への強い憧憬と、それを受けとめた西田の三木への感情から理解できる。そして、二人のその関係を、西田の視点から、何より鮮やかに描き出すのは、一高生三木清が、初めて西田を訪問した時のことを追憶した、西田の長女彌生のエッセイ「あの頃の父」（上田彌生 一九四二）である。そして、その舞台が、田中上柳町の家だったのである。

三木の来訪

このエッセイは、彌生の次男上田久による「祖父 西田幾多郎」（上田久 一九七八）に付録として収録されているが、その後記（二一九頁）にもあるように、初出は雑誌「婦人公論」（昭和十七年）である。それは、「先日三木清さんが私の父に対する思出を書いていらっしやるのを読んで、今まで忘れていた古い記憶がなつかしく私にも蘇ってきた」と始まる。

この三木が書いたというのは、同じ雑誌「婦人公論」の昭和十六年八月号に掲載された三木のエッセイ「西田先生のことも」(三木清 一九四一)のことであり、それには、一高生のとき東京での西田の講演で初めて警咳に接したときの強い印象、その後、「善の研究」を読んでの京大進学の見解、さらに、進学決定後の帰省の折、一高の心理学者速水滉の紹介状を持ち、田中上柳町の家に西田を訪ねたことなどが綴られている。

そして、この三木の来訪のことを、彌生は懐かしく思い出し、エッセイに書いたのである。その中に、次の様な、ひときわ印象深い部分がある。

…父に「今のどなた。」と尋ねると、「今年一高の文科を一番で出た秀才で、僕の講演を聞いて九月から京都の哲学科へ這入ってくる。一高の速水君など大変賞めているので楽しみだ。」と言つて大層嬉しうであつた。父がよい弟子を持つと言ふ事がどんなに嬉しいだろうと私も察して嬉しかった。父の恵まれなかつた長い学生生活の事を長女の私は思ひ出してゐた。さうして、それにしても一高を一番で出て、法科に這入つて官途についたり、実業界で羽振りよく等やるべき筈の人が、文科へ行くなら当然東大にはひるべき筈の人であるのに、京都へ来るとはよくよく特殊の方であると思つて感激した。

彌生が、「文科へ行くなら当然東大にはひるべき筈の人であるのに」と書いてゐるように、このころの学生は、哲学に進む場合でも、京大ではなく東大を選択してゐた。たとえば、三木が入学した大正六年の前年に京大哲学に入学した、京都生まれのキリスト教神学者菅田吉は、京大哲学科の教授陣は充実し始めていたが、まだ全国の優秀な学生が京大哲学科を目指すということはなかつたと、エッセイ「西田先生のことなど」(菅 一九六五)に書いてゐる。このエッセイから引用しよう。

だからその年、三高から京大の哲学科に入ったのは私一人で、三高で一部乙類といわれた同じクラスの連中でも哲学科に入る者は全部東大に行ってしまった。しかし、私が入った年の次の年から、先ず第一に故三木清君が一高からやって来た。このあたりから京大の哲学科が段々とクローズアップして来たのである。その中でも特に西田先生の評判はすごいものであった。

この後、たとえば大正十三年には、西田教授・田辺助教授の一哲学講座だけで入学者が三〇名に及ぶまでになったわけである。昇竜の勢いといえる。一高文系トップの三木が京大に進学したから、優秀な学生が全国から集まるようになったわけではないだろうが、大正六年ころから、菅がいう様な教官のレベルだけでなく、学生の質や量においても、京大の哲学が一本調子に坂を上る様になる、その坂の登り口を見れば三木がいるのである。

京都学派の形成の歴史において、朝永、波多野、和辻、九鬼などの西田・田辺の同僚たちの存在が大きいのは説明するまでもないだろう。しかし、京都学派というとき、やはり、その中心は西田と田辺の弟子たちである。その事を考えれば、この三木の京大哲学入学という出来事は、京都学派の歴史の大きなイベントだったといえるのである。

そして、彌生が父の心を推測して喜んだように、この三木の一高から京大への入学は、西田にとってどれだけ嬉しいことだったか。「哲学研究」の読者には大学で教鞭をとった経験者が多いはずである。特に、その様な方たちには、この嬉しさは説明の必要さえない、自明のことであろう。そして、それこそが、西田の三木に対する姿勢の最大の理由だったはずである。

田中上柳町西田旧宅にまつわる逸話の調査がもたらしたもの

我々は、田中上柳町の家の保存活動の間、この家に関係するエピソードを知るために、三木や彌生のエッセイの様な、西田に関する、家族、学生、同僚などのエッセイで、この家に関するものを集めた。それは、最初は、この家のことを知るためであった。たとえば、彌生のエッセイには、用事を済ませて田中上柳町の家に帰ってきたら、「内玄関にあまり新しくない藁草履が一足ぬいであって、上り框に高等学校の帽子が置いてある」と書かれている。

戦後、三木の藁草履が置かれていた内玄関の土間は、板張りに改装されていたが、板張りにする際に撤去された長式台の跡が確認できた。また、土間から直接上れたはずの階段は、逆向きに付け替えられていることが、調査で判明した。そして、それらのことを考慮にいた上で、西田旧宅の玄関にたたずんで、エッセイ「あの頃の父」の内容を反芻すると、大正六年夏の、その情景を鮮明にイメージすることができた。我々は、この様な作業を通して、西田家が在住していた頃の田中上柳町の家の状況を調査したのである。

その様な調査の際に、最も役立ったのは、物理学者だった次男外彦が残した数々の情報だった。たとえば、全集の月報に収録されたエッセイ「父の住んだ家々」(西田外彦 一九五一、二)は、西田旧宅の当時の様子についての、最も詳しく、最も信頼できる文書であった。そして、この文書と、外彦が戦後に撮影していた田中上柳町の家の写真などにより、建具が障子からガラス戸に変わるなどの変化はあるものの、間取りや、二階外廊下に大きな変更が加えられていないことが分かったのである。

繰り返しになるが、最初に三木の来訪に関する文書を集め調査したのは、この様な旧宅の当時の姿を再現することが目的だったのである。

しかし、その様な、家の歴史を知るための歴史調査により、西田と、この家における、京都学派の面々、特に学生たちのエピソードが多数集まって行くにつれて、我々は、京都学派の形成の歴史について、先に紹介した西田と

三木の関係の様な、従来、あまり語られていなかったことに気が付くようになった。

その様な気付きは、いくつもあり、これから、それを出発点として、京都学派の文化史的研究を進めていくべきだと考えるが、ここでは、その中から、もうひとつ、京都学派を人間集団として理解しようとするとき、西田との人間関係により、この集団を、少なくとも二つの異なったグループに色分けできるという事実を紹介しよう。

三木以前、三木以後

大正六年の三木の京大入学の後、専門家以外の多くの人たちが京都学派の西田の弟子としてイメージする様な、高坂、西谷、高山などが続々と入学する様になった。後年、日本を代表する哲学者に育っていった、彼らの西田への傾倒は並々ならぬものがある。高坂、西谷、高山の三人には、西田や西田哲学をテーマにした著作があり、特に高坂は、このテーマで、少なくとも六冊もの著作を著している。

ところが、この彼らの西田についての文章と、三木、あるいは、三木以前の弟子たち、たとえば、植田、務台、三宅などが西田について書く時の文章のトーンや内容が随分違うのである。

三木以前の弟子たちのエッセイで語られる、西田とのコンタクトは、学問を超えた個人的なものが多い。たとえば、西田と山内と久松と植田が連立って強羅の旅館に泊まり、温泉に入る入らぬで、西田が和尚と呼ぶ久松と、西田との間で、頑固者同士のユーモラスな会話があった事を、二人とも困ったものだと言わんばかりに、植田が暖かい筆致で語る（植田 一九五二）、そういうものが多いのである。

西田が京大に着任した頃に、京大文学部に入学した久松真一の様な「古参の弟子たち」の、西田、そして、西田家との人間関係は濃密である。

たとえば、西田の長男謙が突然の病に倒れた際、久松は、西田には告げないまま、京大病院の謙の病室の床の上

で寝泊まりして看護した。それを伝え聞いた西田が、久松の健康を心配して、感謝に堪えないが止めてくれるように、と手紙を書いている。

また、西田家が、大正十一年に田中飛鳥井町の新築された家に引っ越す際には、山内、務台、久松などが荷物を運んでいる。この時、数年前に脳溢血に倒れ、寝たきりとなっていた西田夫人の寿美は、吊り籠に寝かされて移動したという（西田静子 一九四八）。

これらに反して、世間一般では、京都学派における西田の弟子の代表であるかのように語られることが多い、西谷、高山、高坂などは、植田たちより二〇歳前後下の世代であり、西田の弟子というよりは、孫弟子に近く、植田たちに比較すると、西田との個人としての接点が、案外すくないのである。これらの人々が残した西田についての著作やエッセイなどを分析すると、彼らが西田の訾咳に接する機会は、実は、西田の定年退職後に、一月に一度あったという、弟子たちが集団で西田に会う、面会日などが中心だったことが分かるのである。

たとえば、その著「西田幾多郎」（西谷 一九八五）に収められたものの様に、西田について多くの文章を書いた西谷であるが、実は学生のときに、西田を自宅に訪問した回数は大変少ない。田中上柳町の家は、入学の年に一度訪ねているが、その時の西田の態度に恐れをなして、その後は、卒業試験が終わって、田中飛鳥井町の家、西田を訪ねるまで、西田とは個人的なコンタクトさえなかったようで、この時、初めて、自分が西田と同じ石川県の出身であると西田に告げている（西谷 一九八五）。

その後、西谷の西田へのコンタクトは、段々と増えるのだが、夫人どうしが大変仲が良く、そのため、西谷の子供たちが、田辺の家で遊んでいたという様な、田辺との近さを物語る話と似たものは、少なくとも我々が知る限り、西谷が西田について書いたものの中にはない。西谷の西田への憧憬と傾倒はよく知られているが、実は、それは西谷が西田と親密だったということの意味しないのである。

高坂は、西谷に比べれば西田との個人的コンタクトがあつたようで、「西田幾多郎先生の追憶」（一九四八）で、田中上柳町の家についても語っている。しかし、高坂が、この家について、一番強い印象として語っているのが、次の逸話なのである。

一番忘れられないのは、厠に立つて戻つて来た時、何か私は考え事でもしていたのであろう、間違えて北の間の襖をあけた。すると青白い中年の婦人の方が、ややうす暗い部屋に臥していられた。あとで先生の奥様は多年中風か何かで病臥していられることを知つたのであるが、定めてあの時の御婦人が先生の亡くなられた奥様であられたのであろう。

このころ高坂は、まだ学部学生である。一方で、この少し後に、西田夫人を吊り籠で運んだという飛鳥井町の家への引越しを手伝つた久松は、既に、臨済宗大学（現在の花園大学）の教授であつた。

多い時には、哲学講座の入学者が三〇名にも膨れ上がった時期の孫のような学部学生への西田からの距離が、長男謙の死に至る病の際、病院の床に臥してまで献身的に看護をする元学生の臨済宗大学教授久松真一への距離と、全く異なることは、当然のことなのである。

悉皆調査の時間軸としての田中上柳町の西田旧宅

歴史学には、悉皆調査という方法論がある。これは、例えば、一つのアーカイブの史料を、それぞれの史料の持つ意味を一切無視して、兎に角、端から端まで、すべて調査することをいう。ポイントは、それぞれの史料の意味を忘れ、機械的に、例えば、タイトルのアイウエオ順、あるいは、棚に並んでいる順に調査することである。

我々は、それぞれの文書や歴史的イベントに、何某かの意味を付与して、世界を、そして、歴史を見ている。それが世界観であり、歴史観である。こういうものがなければ、有限的で小さな我々が、世界を、現在を、過去を、「理解」することはできない。

しかし、この歴史観、世界観というものは、我々の思考を、時として悪しき方向に引きずる。特定の方向に視線を誘導することにより、目の前にあるものを無視させてしまうのである。

その様な、価値観がもたらす悪しき無視を避ける方法のひとつが、意味を方法論的に無効にできる悉皆調査なのである。アーカイブにある史料の並びには、必ずしも意味があるわけではない。それは、アーカイブに、史料が入った順番であったり、日記であれば、年代順であったりする。そして、たとえ年代順であっても、その並びに必ずしも哲学的な意味があるわけではない。哲学者が、ある問題を塩漬けにし、何年もたったときに蒸し返すということがあるのだから。

そういう、史料の並びの様な、いわば物理的な順序というものは、我々の「観」を無効にする。悉皆調査は、アーカイブの史料の並びのような、我々の「観」に indifferent なものを鍵にして、もう一度、現実を眺め直す機会を我々に与えてくれるのである。

今回の、この論説で指摘した三木と西田との関係、西田と弟子たちとの関係がまだらであること、こういうことは長らく京都学派の研究をされている方々には、語る必要もない自明なことなのかもしれない。

しかし、我々が、わずかな期間に、この様な気付きを持ちえたのは、哲学者一人一人の思想を深く理解しようとするのではなく、京都学派というものを、ある家を舞台に、現実に生きた人々として理解しようとしたからである。つまり、田中上柳町西田旧宅について知るために、それに言及する月報のエッセイなどを渉猟するうち、我々は、知らず知らずのうちに、人間集団としての京都学派の史料の悉皆調査を行っていたのである。

住居というものは、悉皆調査の時間軸を与え得るのである。特に、田中上柳町西田旧宅は、たとえば西田が学習院で教鞭をとっていたころからの知己である近衛文麿や民芸運動の柳宗悦、さらに、三井財閥の二代の総帥三井高棟と高公のような人物も出入りしていた家である。西田の次男外彦の言葉を借りれば、この「まことに賑やかな家」(西田外彦 一九五一、二二)は、特に、その時間軸の性格を色濃くもっているのである。そして、その故に、この家は重要なのである。

あるいは、哲学者の方たちは、そんな古家の古材の保存など必要なく、家についての記録で十分ではないかと言われるかもしれない。しかし、解体されてしまったので、それを経験していただくことができないのであるが、実際に歴史の現場に立ちながら、資料が語る歴史を理解すること、単に紙の上の文字、ただから資料が語る歴史を理解することには、大きな違いがある。前者の場合、三木の来訪に関連して述べた様に、情景が目には浮かぶのである。その印象の強さは、実に大きい。それ故に、歴史の現場としての家屋は重要なのである。

残念ながら田中上柳町西田旧宅は解体され、その部材の一部しか残っていない。しかし、多くの人たちに、この家まつわる歴史を経験していただきたくて、家屋内部の三六〇度パノラマ写真や、数多くの静止画や動画を作成し、京都学派アーカイブで公開している。

是非、一度、我々が撮影保存した映像を見ながら、この家まつわる逸話を読んでみて欲しい。もし、その時、西田幾多郎と、その時代の人たちの姿が、生き生きと蘇ったならば、非力な我々の努力も少しは意味があったといえるのだろうか。

参考文献

- 相原信作「師弟」、西田全集昭和四〇年四月月報、(下村 一九七二)に収録、岩波書店(一九六五)
 市川秀和「西田幾多郎の書齋「骨清窟」と哲学の現場」、福井工業大学研究紀要、第三三号(二〇〇三)、<http://crl.fhb.u-fukui.ac.jp/dspace/bitstream/10461/3518/1/KJ00004279754.pdf>
 植田寿蔵「西田先生」、西田全集昭和二十七年五月月報、(下村 一九七二)に収録、岩波書店(一九五二)
 上田久著「祖父西田幾多郎」、南窓社(一九七八)
 上田彌生「あの頃の父」、婦人公論、昭和十七年新年号、(上田久一九七八)に収録、中央公論社(一九四二)
 菅内吉「西田先生のことなど」、西田全集昭和四〇年六月月報、(下村 一九七二)に収録、岩波書店(一九六五)
 高坂正顕「西田幾多郎先生の追憶」、国立書院、復刊、燈影撰書二十六卷、燈影舎(一九九六)、(一九四八)
 下村寅太郎編「西田幾多郎―同時代の記録」、岩波書店(一九七二)
 西田静子「父」、西田静子、上田彌生共著「わが父西田幾多郎」、アテナ文庫、四卷、弘文堂(一九四八)
 西田外彦「父」、知と行、十一号、(下村 一九七二)に収録、大東出版社(一九四六)
 西田外彦「父の住んだ家々(一)(二)(三)」、西田全集昭和二十六年三月、十月、二十七年五月月報、(下村 一九七二)に収録、岩波書店(一九五一、二)
 西谷啓治「西田幾多郎」、筑摩書房(一九八五)
 三木清「西田先生のことども」、婦人公論、昭和十六年八月号、三木清全集十七卷、岩波書店(一九八五)に収録、中央公論社(一九四一)
 三宅剛一、「思い出すまま」、西田全集昭和二十八年四月月報、(下村 一九七二)に収録、岩波書店(一九五三)

(筆者 はやし・すすむ 京都大学大学院文学研究科教授／情報・史料学)
 (筆者 いちかわ・ひでかず 福井工業大学工学部教授／建築学)